

NTR 短編集

やめてといえなかつた夜

著 真田の宮

にやむ書房

目次

第一話 親友の隣で

― 友達の彼氏 ―

第二話 お正月の夜に

― 義兄 ―

第三話 隣の部屋の人

― 引っ越し先の隣人 ―

第四話 もう終わったはずだった

― 元カレとの再会 ―

第五話 同期という距離

― 同期の男 ―

第一話 親友の隣で — 友達の彼氏 —

「みお、悪いけど、ちょっと行ってくる。颯太、みおのこと頼んだよ？」

あかりはそう言って、出かけた。鍵を預け、出ていく背中を見送る。それからリビングに戻ると、ソファでテレビを見ていた颯太と目が合った。

「……あの、お邪魔します」

「いや、あかりに頼まれちゃった。俺も用事があったんだけど」

そう言いながらも、テレビの音量を下げる。大した用事じゃなかったんだろう。あかりは軽口を叩いて部屋を出たけど、結局、みおと颯太は、このままあかりが戻ってくるまで一緒に過ごすことになった。

親友の彼氏と二人きり。

一瞬だけ、胸がざわついたけど、すぐに振り払う。だって、私はあかりのことが大好きだ。颯太のこと、あかりが好きだから、いい人なんだって思っている。それ以上でも、それ以下でもない。

「何か飲み物、いる？」

「いや、大丈夫」

「そう。じゃあ、俺も見てる」

そう言って、颯太はリモコンを手に持ち直した。無駄な会話はしない。あかりがいないと、彼はほとんど喋らない。静かで、少し遠くにいるような人。

でも、その距離感が、逆に胸をざわつかせる。彼の横顔を、つい、盗み見てしまう。きりつとした鼻筋、薄い唇。あかりがよく「キスするの、気持ちいいのよ」と言っていたけど、あの唇が、あかりの唇をどうやって奪っているのか。想像しただけで、体の奥が熱くなった。

「……何考えてるの？」

突然、声をかけられて、びっくりと肩を震わせた。颯太が、こっちをじっと見ていた。その目は、いつもより深くて、見つめられると、逃げられない気がした。

「な、何も」

「みおは、いつもそうだよ。何か考えてる」

「……違う」

「あかりのこと？」

「そうだよ」

「……そっか」

それ以上、何も言わない。でも、その静かな視線が肌を這う。私は、居心地悪くなって、ソファの端に体を寄せた。

あと一時間で、あかりは帰ってくる。それまで、この静けさをどうやってやり過ごせばいいのか。無意識に、スカートの裾を握りしめていた。

一時間は、意外と長かった。テレビはつけているのに何が映っているのか分からない。耳に届くのは、隣の穏やかな呼吸と、時折、時計の秒針の音。それだけが、この部屋の時間を刻んでいる。

「……みお」

名前を呼ばれて、体が硬直した。颯太が、そっと近づいてくる。その距離が、怖くて、でも、期待してしまう自分がいて、たまらなくなった。

「何？」

「あかり、もうすぐ帰ってくるんじゃないかな？」

「……うん。そうだね」

「なら」

彼は、そこで言葉を切った。そして、私の手を、そっと握った。その手は、あかりの手を握っている手と同じなのに、私の手の中では、全然違うものに感じられた。温かくて、大きくて、逃げられないように、そっと絡みつく。

「やだ」

か細い声で、そう言った。けれど、手を離そうとはしなかった。自分でも、なぜだか分からない。

「みおは、あかりのこと、本当に好き？」

「当たり前でしょ。親友だもん」

「なら、いいんだ」

そう言って、彼は、私の頬に、そっと手を当てた。その手のひらが、熱くて、私は息を飲んだ。目を見開いたまま、彼の顔を見上げる。

「でも、俺は、みおのこと見てた」

「え……」

「あかりと一緒にいるとき、いつも、みおは少し離れて見てる。何を考えてるのか気になった」

「そ、そんなことない」

「あるよ。例えば、今みたいに」

彼はそう言って、唇を寄せた。目の前で、彼の顔がゆっくりと近づいてくる。私は目を閉じることもし
できずに、ただその瞬間を待っていた。

唇が、重なった。

柔らかくて、温かくて、でもあかりのものじゃない。彼の私へのもの。その事実が、頭の中ではちば
ちと音を立てた。

「……やだ」

「嘘だ」

彼はそう言って、さらに深くキスをする。舌が、そっと割り入ってきて、私はつい、口を開いてしま
った。体が自分の意思に反して、彼を求めている。あかりの彼氏なのに。親友を裏切っているのに。

「みお、可愛い」

彼の低い声が、耳に響く。手が、私の腰に回って体を引き寄せられる。胸が、彼の胸に押しつけられて、鼓動が速くなるのが分かった。

「やめて……あかりが、帰ってくる」

「まだ、大丈夫」

そう言って彼の手が、私の胸に触れた。ブラウスの上からそっと揉まれて、私の敏感な体は小さく声を漏らしてしまった。

「あっ」

「声、可愛いね」